

Vol. 68
FU風伯HAKU
Spring 2008



展覧会紹介

こどものとも 絵本原画展

7月15日[火]～8月17日[日](月曜休館 ただし7/21日[月]は開館) 美術博物館

1956(昭和31)年4月の創刊以来、常に日本の絵本界をリードし続けてきた福音館書店の月刊創作絵本「こどものとも」は、アドベンチャーやファンタジーがふんだんに織り込まれたゆかいな物語、日本をはじめ世界各地に伝承される昔話、動物や乗物、生活に関わる様々なエピソードをモチーフにした作品など、バラエティーに富んだ内容で世代を超えて読み継がれ、海外でも親しまれてきました。本展では、各時代を代表する絵本の原画11作品・約200点を一堂に展示し、同誌の50年にわたる歩みとともに絵本原画の魅力を紹介いたします。絵本ファンのみならず、お子様から大人までお楽しみいただける夏休み企画です。ぜひ、ご家族の皆様でお出かけください。

◆絵本読み聞かせの会

会期中の水・日・祝日(ただし、8/10は除く)

13:30～14:00、14:30～15:00

○上記のほか、絵本画家・スズキコージさんを迎えて壁画の共同制作を行う「夏休みワークショップ」や、キャラクター似顔絵応募など子供向けイベントの開催、人気キャラクター「ばばあちゃん」といっしょに記念写真がとれる撮影コーナーの設置などを予定しています。



「おなべおなべにえたかな?」こいでやすこ・絵・作(1995)



「カニフツン」元永定正・絵 金岡寿夫・作(1997)

生誕290年 木喰展—庶民の信仰・微笑仏—

開催中～6月22日[日](月曜休館) 美術博物館

おすすめの1点



「薬師如来」
新潟県柏崎市 57.0cm

木喰仏の特徴のひとつは、日々のくらしのなかの切実な願いから生まれたということであろう。一般的な仏像から感じる神秘や畏怖からは遠く、親しみやすい。三河新城でも木喰仏は人々の近しい信仰に守られ、現在に至っている。「大黒天」は甲子待ちの講中持ち回りで祀っていた。また、ちいさな堂に祀られる「十一面観音菩薩」は傷みが激しいが、それはかつて子供の遊び相手であったからという。

本像もそうした庶民信仰の対象である。薬師如来は病気や貧困から人々を救い、心身をやすらかにする功德があるとされる。像の前に積まれた石で患部を擦り、治ったときにきれいな小石を齢の数だけ返す習慣があるという。(豊橋市美術博物館学芸員 増山真一郎)

豊橋市美術博物館 「新」収蔵品展Ⅱ ～後藤和子コレクション～

7月1日[火]～8月24日[日]
(月曜休館 ただし7/21日[月]は開館) 美術博物館

眼科医として豊橋で長年医業にたずさわってきた故・後藤和子氏(1916-2007)は、平成2年より美術品収集を始めました。その内容は中村正義や大森運夫など地元画家をはじめ、東山魁夷・奥村土牛・片岡球子・大山忠作・林武・荻須高德・絹谷幸二といった名だたる画家の作品、朝倉響子や数内佐斗司の彫刻、加藤卓男・藤田喬平・今泉今右衛門らの工芸品まで多岐にわたります。後藤和子氏は昨年4月に逝去されましたが、没後ご遺族より45点の作品のご寄贈をいただきました。このたびの新収蔵品展Ⅱは、その寄贈コレクションを初めて公開するものです。一人の美術愛好家の目を通して集められた美の粋をどうぞお楽しみください。

レトロ豊橋の風景展 —豊橋市写真帖の世界—

開催中～6月8日〔日〕 二川宿本陣資料館

豊橋市は、昭和元年（1926）市制施行20周年を迎えると共に、翌2年には昭和天皇の行幸がありました。これを記念して同2年12月に「行幸記念 豊橋市写真帖」を刊行しました。

この写真帖には、市内の風景や官公庁・学校・商店・寺社など多くの写真が掲載されています。これらの風景や建物は時代の変化による建て替えや、戦災による焼失などによりその多くは現在では見ることができません。

この展覧会では、この写真帖に掲載された風景や建物を写真パネルで展示すると共に、当時の市街地図や絵葉書などにより戦前の風景・町並・出来事などを紹介します。



豊橋駅（「行幸記念豊橋市写真帖」より）

広重の描いた東海道

6月14日〔土〕～7月13日〔日〕 二川宿本陣資料館

江戸時代後期になると浮世絵版画は、それ以前の役者絵や美人画から風景画へとその主流が移り変わりました。風景版画の第一人者として活躍した歌川広重は、生涯にわたって20数種類の東海道のシリーズを発表しました。

本年は、広重没後150年にあたります。これを記念して晩年の代表作であった「五十三次名所図会（竪絵東海道）」を一堂に展覧するとともに、初期の代表作であり出世作であった保永堂版・行書版・隸書版やその後に発表された各種シリーズにより「吉田」「二川」の場面を展示し、広重の世界を紹介します。

広重が描く東海道の風景を鑑賞することにより、往時の景色や旅人の装束、江戸時代の風俗をご体感ください。



歌川広重 「五十三次名所図会 吉田」

Museum Check おでかけになりませんか？

会場	会期	展覧会名
岡崎市美術博物館	6月1日～7月13日	色彩の詩人 シャガール展
豊田市美術館	7月5日～9月21日	ブラジルの現代美術
愛知県美術館	6月14日～7月27日	誌上のユートピア 近代日本の絵画と美術雑誌 1889-1915
名古屋市美術館	7月5日～9月28日	「版」の誘惑展
名古屋ポストン美術館	開催中～9月28日	クロード・モネの世界
浜松市美術館	6月10日～7月21日	イートン・カレッジ/ダーラム大学所蔵 古代エジプトの美展
名古屋市博物館	開催中～6月8日	初公開 松坂屋京都染織参考館の名品 小袖 江戸のオートクチュール
三重県立美術館	6月29日～8月17日	没後80年 佐伯祐三展
静岡県立美術館	7月12日～8月31日	唐招提寺金堂 平成大修理記念 国宝鑑真和上展

方法はいくらでもある。知恵を出し合い、魅力ある美術博物館づくりをすすめよう。

「これからの美術博物館を考える」シリーズも最終回を迎えました。将来新しい美術博物館ができるのかどうか、今はわかりません。しかし地域にとって、市民にとって美術博物館はいかなる機能を持ち、どんな存在であるのか、あるべきなのかを、この際よく考えてみたいと思います。アートは人間になぜ必要なのか。デザイナー、美術家として幅広く活躍されている味岡伸太郎さんに、私たちの疑問に答えていただきました。

質問1：人間の暮らしの中で、アートとはどのようなものなのでしょう。お聞かせください。

味岡：アートはどこへ向かうべきかという問題を考え、まずアートとは何かと言ったとき、いろんな定義があるけど、僕なりの解釈をすると、人間の行為はすべてアートになるべきだと思っています。最終的にはそれが理想です。ということは人間の営みそのものが美に彩られる世界を求めることでもあります。ビジネスもそうですし、学ぶこと、昔で言うと修行すること、食べるものを作ること、着るものを作ることなど、人間の営みすべてを二つに分けて考えると、生きていくために直接必要な部分と、それとは別に感覚的な営みの部分があるじゃないですか。それがアートの世界だと思っているんです。つまり人間というものが生きていくためには、その両方が備わって完結すると思うのです。

なぜアルタミラの洞窟に壁画が描かれたのか。もちろんそこには呪術的な意味があり、牛を描くことによって牛を得ることができると洞窟の人々は考えた。民俗学的に言えばそれを感染呪術と言う。文学的に言えば言葉の考え方。その言葉を口に出すとそれが実現する。そのために絵を描いたと説明できます。生活のための行為と絵を描くこととの間は、昔はもっと近かった。それがいつしか離れて生活と芸術という二つの営みになったのですが、それを再びすべての営みが美となるような、芸術と日常の営みがすべて美に彩られる、そういう関係を創りだすことに芸術は向かわなくてははいけないと思うのです。

質問2：地域における美術館とは、どのようなものであるべきでしょうか。

味岡：美術館は何をする場所であるべきかという話になりますが、美術館は“美”を通して人々を啓蒙するため、あるいは“美術”というものの本当の意味をわかってもらう活動をする場所と定義したとします。そのとき、100年前の評価の定まった何億もす

る作品を買うことが本当にいいのか。それとも、現代の若い作家の作品で学芸員がこれと思うものを買うことにするのか。後者ならば、若いアーティストは確実に育ちます。

そこで、豊橋の美術館はどう判断するかということになる。そういうことを本当に考えているのか、豊橋の美術館をどうするかというのはそこから考えなくてははいけない。



味岡伸太郎氏

質問3：では豊橋の美術館は、どのような活動と展開をするべきとお考えでしょうか。

味岡：豊橋にしかできない美術館っていうのは何なのか、建物の問題じゃなくて、何を収蔵して何を見せるかということ、まず決定していなければならない。豊橋ですべてのことを網羅できるような美術館なんて無理なんです。

地方美術館の使命として、地方作家の育成と地方の美術の歴史を残すということは、この地域の美術館でしかできない仕事、これは欠かしてはならない条件です。ただ地域のことだけでは、日本の美術の歴史、世界の美術の歴史を市民が知ることはできないのだから、最低一つの普遍性を持つ別のテーマが必要だと思うのです。

哲学の考え方と一緒に、一つのある言葉、例えば「愛」という言葉があります。それを突き詰めていけば最後には一つの真理に結びつくのです。美術も同じだと思います。テーマはどれでもいい。それを突き詰めていけば、結論は同じところに行くはずなのです。だから、どれか一つだけが正しいということ

もないのです。一つ、思い切って決めてしまえばいいのです。

ただ、総花的にすべての美術を網羅することはできないとなれば、当然、市民や議会から不満が出るでしょう。もちろん作家側からも出ます。どうして俺の作品は入らないんだと。そんなことは実は関係のないことなのですが、そういう勇気があるかってことです。市に、美術館に、学芸員に、市民のすべてがその勇気を認めてあげられるのか。それが可能となって初めて一つの方向性を持った美術館、そして、それにぴったりの建物をどうするのかという話になっていくわけです。

例えば彫刻を中心とした美術館にする。豊橋公園をメインに収蔵した彫刻を設置していく。それを豊橋の街中にも広げる。美術館から市役所、そして駅まで続く彫刻の道。その道一帯を彫刻の美術館にする。これならば彫刻を買う金は要りますよ。しかし新しい美術館の建物は必要ないってことでしょ。これはそうしろと言っている訳ではなくて、方法はいくらかもあると思うのです。それを起爆材にし、全国的な彫刻コンクールを開催していく、といった活動によって市民と共に美術館を作り上げていく。何十年か経てば結果が立派に形になるじゃないですか。それだけの勇気を我々は持てるのかにかかってくる。

費用対効果の話で言えば、予算が将来的にどの程度美術館に使えるのか、展示の問題も建物にはお金はかけられないから、その代わりにこの分野だけには予算をつけてくださいというように要求していけば、豊橋という条件の中でこれができるというものに自然に絞られていくと思うのですよ。

質問4：一方、活動の基盤となる組織や施設の面で、現在の美術博物館に必要なことはなんですか。

味岡：まず、市民展や貸し画廊スペースは、市民ギャラリーを別に作り、美術愛好家の活動場所と本来の美術館活動とを分けてもらいたい。

そうして、学芸員の人たちが十分に活動できるスペースと環境を作る。学芸員の数も増やす必要がある。予算がないとなればそれも大変なことなただけど、学芸員の問題は美術館にとっては最も重要な問題だと思うのですよ。

あと絶対的に現在の美術博物館に不足しているのは収蔵庫だと思います。豊橋も収蔵品にはお金を掛けて集めている。お金を出して収蔵したのだからそれは少なくとも後世に残さなきゃいけない。収蔵庫は今どういう状況か正確には知らないけど、おそら

く、限界のはずです。

展示については、どんな展示にも対応できるようにしたい。例えば、今の美術博物館には釘を打てないけど、打てるようにする。穴はそのつどバテで埋めて使えばいい。そのためにも壁は白塗装にする。新しい美術館を作る予算がないとしても、せめてそういう現代の嗜好にあった美術館に改装するという事は、今の美術博物館でも十分対応できると思うのですよ。そう難しい問題ではないと思う。あるものを最大限活かす活動を続けて、その活動の中で学芸員も学び、市民も学んでいけば、その中から、新しい美術館の姿も生まれてくると思うのですよ。

それに僕は別に今の豊橋の美術博物館をそんなに悪いと思ってないのです。中庭のある空間も、それを抜けて緑が見える空間だって悪くはないです。ただそれを活用するかしないかは学芸員の能力です。学芸員の権限も含めてそういう体制をしっかり作ってもらってことが重要なのです。

今一番不足しているのは、収蔵庫と学芸員。そういうことに対して、友の会が声をあげるのはいいことじゃないですかね。その活動の中でおのずと美術館はどうあるべきかが見えてくると思うのですよ。今の美術博物館の中でもできることはまだいっぱいあると思う。全国全ての市に美術館があるわけではない、とりあえず豊橋は美術博物館があるのだから、それをどう活かすか。もっともっと知恵を出し合わなければ。

魅力的な美術館づくりのためには、その果たすべき役割と機能についてもっと議論が必要なのだと思わためて感じました。味岡さんにはお忙しい時間を割いてインタビューに答えていただき、心より御礼申し上げます。

また、編集部では会員のみなさんからのご意見やご感想をお待ちしています。どんなことでも結構です。声をお寄せください。

(風伯編集部)

味岡伸太郎 (あじおか・しんたろう) 氏 プロフィール

1949年、愛知県豊橋市生まれ。画家山口長男よりかけられた言葉「デザインと美術がせめぎ合う山の稜線を歩け。デザインに係わることで、美術が社会との接点を見失わず、美術に係わることでデザインが社会に受け入れられていく」以後、現代美術、グラフィック・タイプフェイス・建築のデザインと幅広く活動。1984年、かな書体「小町」「良寛」をデザイン。現在までに約130のかなをデザイン、広く使われている。1994年、「日本のデザイン-1950年以降」展(アメリカ・フィラデルフィア美術館)など数々の国際展に出品。1990年以後は土を素材とした美術作品を国内外の美術館、画廊に出品。

友から友へ

Members to Members

心に残る作品

変な絵？

安藤 久美枝 (592)



今から20年以上前のこと。長男が小学校3年生の時、遊びに来た友達が掛けてあった絵を見るなり言ったのです。「ゲッ気持ち悪い！何だ、この頭にぐにゃぐにゃの時計がのったガイコツ」。すると、長男が説明を始めたのです。「それは人生だよ。頭の上の時計はその人の生きてきた時間だよ。その人は死んだけど、女の人のことが

心配で骸骨になっても後ろから見守っているんだよ」私はそれを聞きながら、確かにそうとも解釈できる。一体誰が教えたのか。友達が帰った後で、何故あのような説明をしたのか聞いてみると、「どうして時計が流れているのか、なぜ

骸骨なのか考えていたら、そう思った」その答えに驚いて、本当に自分で考えたのかと聞くと、「間違っているの？」と聞き返してきました。絵の見方に正しいとか間違いというのはなく、自分がどのように感じるかが大切だと私は答えました。その絵は遊びに来る子供達の興味を引くらしく、他の絵の時は素通りなのに、その絵が掛けてあると何かしら言葉をかけてきます。「ガイコツ元気か」「何でガイコツなのに筆もってるんだ」「この絵には愛を感じるね」「こわい」等それは様々です。

この変な絵は、今も時々引っ張り出しては楽しんでいる1枚の版画、タリ作「ガラくさみりの神々しい後姿」。頭には時計、絵筆を持った骸骨が、オレンジのマントを着た女性の後姿を見守っている絵です。

アートとの出会い

板倉 章郎 (1281)



日々、慌しく過ぎてゆく時間のなかで、ふと足を止めたくなるときがあります。それは逃避とも違う、心が休息を求めている時間なのかもしれません。

そんなとき、ひとはスポーツをしたり、おしゃべりをしたり、カフェで読書したりします。私にとっての心の休息、それは、アートとの出会いであります。

そんな私にとって、一枚の心に残る作品があります。「夕顔欄納涼図」と題された一枚の屏風が私のそれになりま

す。作者の久隅守景は江戸時代前期に活躍したとしかわからない謎の多い人物ですが、この絵は国宝に指定され東京国立博物館に所蔵されています。構図は残暑の夕べ、夫婦と子がヘチマ棚の下で涼を楽しむ、そんなささやかな日常の一コマを切り取ったこの絵を初めて見たとき、なんて豊かなだろうと感じたのを、今でも鮮明に記憶しています。

今私たちを取り巻く環境は、とてつもなく早いスピードで駆け回っています。そんなスピードに流されそうになったとき、ごさを敷いて寝そべったその姿は、時代を経て私たちに強く訴えかけてくれます。そう、これでいいんだと。

こうしたアートとの出会いが私を勇気づけ、日々の生活に新しい風を運んでくれます。

作品巡りが元気のもと

新實 眞知子 (986)



美術館・博物館での展示作品の鑑賞は、主に二つの方法があるように思われます。印象に残った作品を一人で楽しむ方法、そして家族や友の会会員と一緒に作品に触れ、共有体験や感想を分かち合っ

て鑑賞する方法です。過日、桜の開花に誘われ家族と訪れた九州国立博物館は、後者の

楽しみを改めて実感することができました。博物館のキャッチフレーズは「学校よりおもしろく」「教科書よりわかりやすい」「文化は西から九州から」と親しみやすい言葉でした。子供から大人まで九州の歴史、文化を実体験を通して学ぶことができる点が最大の魅力で

した。青色のガラス張りで流線形をした建物は、多くの人達が笑顔で集い、お祭りのような熱気にも満ちていました。とりわけ常設展示が印象深かったです。遣唐使の積み荷を復元させ、展示物に直接触れることができ、透明度が高く機密性に優れたガラスケース（エアタイト）の中は、照明の当て方の工夫によって、実際に展示物を手にしているかのような感覚も味わいました。家族と会話をしながら館内を見て回り、自分とは異なった感じ方や意見に驚かされ、新たな発見もできました。

これからも美術館・博物館を訪れる機会を持ち続けたいものです。作家や作品に触れ、親しむことを通じ、元気になる自分に気づくからです。作品の背景を知り、理解を深め、いつしかかけがえのない存在に変わる…そんな作品との出会いを大切にしたいと思います。

こんにちは よろしく! この春、新たに美術博物館にいられたスタッフをご紹介します。



むら かみ のほる
村上 昇
管理文化財グループ
(学芸員)

趣味◎旅行、とくに温泉地めぐり
好きな芸術家等◎池大雅
友の会へ一言◎4月から豊橋市民になりましたので、豊橋に早く馴染むことが目下の課題です。豊橋は美術品や文化財を大切にしている街という印象があります。今までの経験を活かし、文化財保護のお役に立てればと思います。



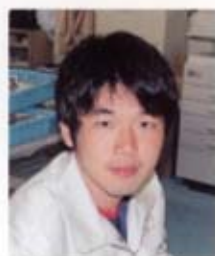
きく ち なお や
菊池 直哉
管理文化財グループ
(学芸員)

趣味◎サイクリング
好きな芸術家等◎内田新哉、原田泰治
友の会へ一言◎文化財担当の学芸員として4月から美術博物館でお世話になることになりました。生まれは茨城で、学生時代を信州で過ごし、豊橋には飯田線の乗換えで何度か駅を利用したことくらいでしかご縁がないため、右も左もわからないまま、毎日あたふたと過ごしております。今年は庶務担当として、事務室で慣れない書類と格闘しておりますので、美術博物館へお越しの際は気軽に声をおかけ下さい。よろしくお祈りいたします。



いちかわ なお こ
市川 奈保子
管理文化財グループ

趣味◎スポーツ観戦(特に野球)
好きな芸術家等◎芸術家は特にありませんが、小さいころ、親に連れられて自然史博物館によく行った影響で、恐竜が好きです。
友の会へ一言◎今年、新入職員として採用されました。社会人としても、美術博物館のスタッフとしても、まだまだ何も分からない新人なので、至らない点も多くあると思いますが、よろしくお祈りいたします。



にしまつ けんいちろう
西松 賢一郎
埋蔵文化財担当嘱託員

趣味◎スポーツ観戦(野球、サッカー、ラグビー)
好きな芸術家等◎芸術家は特にありませんが、鎌倉以前の仏像に関しては興味があります。
友の会へ一言◎今年度より牟呂の発掘調査に携わることとなりました。至らない点が多くあると思いますが、よろしくお祈りいたします。また、牟呂付近にお越しの際、調査現場に足を運び生の文化財に触れていただければ幸いです。

友の会ホームページができました!

このたび新しく友の会ホームページを立ち上げました。イベント情報、会報誌「風伯」の紹介、入会のご案内などがご覧いただけます。豊橋市美術博物館のホームページともリンクしています。ぜひアクセスしてみてください。

<http://www.museum-toyohashi.jp>

秋の研修旅行

「アートと光と自然に癒される旅」〈予告〉

香川県の4つの美術館を巡ります。直島の地中美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、東山魁夷せとうち美術館、イサム・ノグチ庭園美術館…題して「アートと光と自然に癒される旅」。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

会員の更新手続きをお願いします。

会員の更新がお済みでない方はお早めにお問い合わせください。「木喰展」の観覧で美術博物館へお出かけの際は、あわせて更新の手続きをよろしくお願いいたします。

収蔵品紹介

[山湖緑]

東山 魁夷 ● HIGASHIYAMA, Kaii

1957年-1962年 (昭和32-37) 紙本着彩

35.8cm×41.8cm

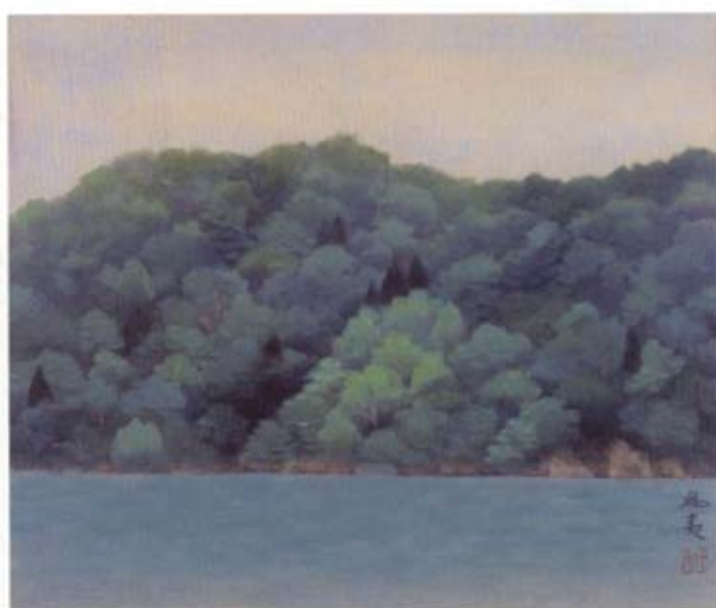
後藤和子コレクション

代表作「残照」「道」をはじめ、日本人の原風景ともいべきノスタルジーと静寂に満ちた精神性の高い作品によって人々の共感を呼び、国民的風景画家と呼ばれた東山魁夷(1908-1999)。平成11年に90歳でその生涯を閉じたが、作品の人気は今もなお衰えることがなく、生誕100年を迎えた今年はかつてない規模の回顧展が東京国立近代美術館ほかで開催されている(同展は長野県信濃美術館へ巡回。7/12~8/31)。

幼い頃から絵を描くことが好きで洋画家を志していた魁夷であったが、美術学校受験に反対だった父親が日本画科ならと許可をしたため、やむなく日本画の道へ進んだ。学校を卒業した画家は、終戦間近に応召し熊本に配属され、そこで風景への開眼ともいべき体験をすることになる。汗と埃にまみれ、爆弾を持って戦車に肉薄攻撃する練習を繰り返す日々の中で、生きる望みも絵を描く望みもついていた時に眼にした肥後平野の広大な眺望。旅なれた魁夷にとってそれは平凡な風景であったが、涙が落ちそうになるほど感動した。その理由を「死を身近にはっきりと意識する時に、生の姿が心に強く映った」と語っている。

ここに描かれた風景は初夏であろうか。清々しい青空、豊かに生い茂る山の樹木、満々と水をたたえた湖、視界すべてが青緑に彩られた世界である。確かな制作年は明らかでなく、描かれた場所も残念ながら特定されていないが、画家の精神が沈潜する風景であることにはちがいない。画面から伝わる、観る者の心までも浄化してしまうような清浄感は、魁夷の作品の大きな魅力である。

また、この頃の作品の特徴であるが、画家は構成や



フォルムに関心を寄せている。湖をわたる微風に波立つ水面、明暗の微妙な色彩の諧調が交錯する木々のシルエットは大きな筆触で表われ、鼓動のように律動する。

明治41年に横浜で生まれ、幼少期を神戸で過ごした魁夷であるが、母親のくには豊橋の出身で実家は火口を作る家業であったという。このようなゆかりから長年当館の収蔵対象作家の一人に挙げてきたが、昨年ご寄贈いただいた後藤和子氏(1916-2007)の貴重な美術品コレクション45点のなかに本作が含まれており、作品収蔵の念願が叶うこととなった。

「山湖緑」は、7月1日から8月24日まで新収蔵品展Ⅱで初公開する。夏の一日、ぜひこの作品と対峙して、清爽とした気分を味わっていただきたい。

(豊橋市美術博物館学芸員 岡田亘世)

編集後記

味岡伸太郎氏のインタビューは2ページではとても載せきれないほど深く広く、興味深い話でした。「学校で美術や音楽の知識は教えられたが、いかに感じるか、いかに受け止めるかということについては話を聞いたこともなかった。今にして思えばあれはおかしい」という点で意見が一致しました。

新しい美術博物館が出来れば、今抱えている問題点が全て解消するほど事は簡単ではありません。美術や音楽に向き合う時は、自分自身もまた今までの人生を試されているという覚悟はしているつもりです。建物を造るかどうかの論議だけでなく、その果たすべき役割と機能について、もっと議論が必要です。あなたはどうか。

(鈴木伊能勢)

【表紙作品】

木喰「茶師如来」(新潟県柏崎市)

1805年 高さ57.0cm

「生誕290年 木喰展―庶民の信仰・微笑仏―」より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第68号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 原文成

担当副会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 山崎恵子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成20年5月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。